世界から学ぶメディア・リテラシー教育と
メディア・リテラシーを取り入れた授業の提案

A11-1409　重信　裕基

1. はじめに

近年、スマートフォンや iPad などのタブレット端末の普及が進み、今や小学生までもがスマートフォンを持ち歩く時代になってきており、たくさんの情報をすぐに手に入れることが可能である。しかし、すべての情報が正しいとは限らない。その中で、情報を批判的に読み解き、必要な情報を引き出し、活用し、発信することができる能力(メディア・リテラシー)を子どもたちに育ませる教育、つまりメディア・リテラシー教育の充実を図ることが必要である。

しかし、日本ではメディア・リテラシー教育が現行学習指導要領に明記されていないためか、あまり重要視されていないように見受けられる。それに対し、イギリスやカナダでは、メディアの発展に伴い、メディア・リテラシーを子どもたちに育ませることの重要性をいち早く認識し、すでにメディア・リテラシー教育をカリキュラムに取り入れている。【1】

そこで、イギリスやカナダの教室で行われた授業のアイディアを参考にし、日本でも実践できそうな授業を提案する。その中でも、日本の小学校教育に焦点を定め、どのような題材をどのように活かし、どのような効果が期待できるのかを分析し、論じていく。

2. 本研究の方針

メディア・リテラシーとは、情報を鵜呑みにせず、取捨選択をして活用し、発信していく能力であるとも言い換えられる。子どもたちがすべての情報を正しいと思うのではなく、必要な情報だけを選びぬけるようになり、それを活用し、発信できるようになることが学校教育に求められている。

そこで、文献【1】をもとに、イギリスやカナダの教室で行われた授業から学んだことを活かし、日本の小学校教育で実践できそうな授業について考え論じる。

3. 世界のメディア・リテラシー教育

3.1　メディア・リテラシーの歴史

メディア・リテラシーは 1930 年代のイギリスで、文学批評家の F・R・リーヴィスとデニス・トンプソンがマスメディアを批判的に読み解くことは、子どもを低俗な大衆文化の影響から保護するのに役立つと説いたのが原点だと言われている。

1960 年代半ばから 1970 年代には、文化はもはや特権階級のみが作るものではなく、人々の生活をとりまく全てであり、多様な表現形式をとるものだ、と訴えたカルチュラル・スダディーズという思潮の登場により、様々なメディアが授業に取り入れられるようになった。

1982 年にユネスコで、メディア教育に関するグリュンバルト宣言より、メディア教育の充実が訴えられ、1987 年にはカナダのオンタリオ州が世界で初めてメディア・リテラシーを国語のカリキュラムに取り入れられた。1988 年にはイギリスも国語のカリキュラムに取り入れている。

3.2　イギリスのメディア・リテラシー教育

イギリスには、非公式だがメディア・リテラシー教育が 60 年近く行われてきたという伝統がある。メディア・リテラシー教育は、メディアの普及に伴い、時代ごとに段階を追って発展し、今やメディアが社会の重要な意味をつくり出しているとともに、子どものまわりを取り巻く文化の中心であることから、メディアを理解し、検討を加えてみることの重要性が認識されるようになった。

学校では、広告作りや動画制作などを通して、メディア・リテラシーを子どもたちに育ませている。

3.3　カナダのメディア・リテラシー教育

メディア･リテラシーの 8 つの基本的な概念として、オンタリオ州の教育省は以下のものを挙げている。【2】

①メディアはすべて構成されたものである。
②メディアは現実を構成する。
③オーディエンスがメディアから意味を読み取る。
④メディアは商業と密接な関係にある。

⑤メディアはものの考え方（イデオロギー）と価値観を伝えている。
⑥メディアは社会的・政治的意味を持つ。
⑦メディアの様式と内容は密接に関連している。
⑧メディアはそれぞれ独自の芸術様式をもっている。

学校では、ハロウィーンをテーマに、メディアがどのように取り上げているかを調べることやニュース番組を実際に作ってみるなどの活動を通して、メディア・リテラシーを子どもたちに育ませている。

4. 授業の提案

イギリスやカナダでは、メディア・リテラシー教育が国語の授業の一部に取り入れられていることから、日本の小学校の国語の授業に焦点を定め、メディア・リテラシーを取り入れた授業の提案をする。以下、指導案の概略である。

単元名　新聞を読み解こう　対象　5・6年

単元設定の理由

必要な情報を素早く手に入れることができるため、子どもたちが新聞を読む機会はほぼ皆無だと考えられる。しかし、新聞にはテレビやインターネットで得る情報量とは比べものにならないほど多くの情報と具体性があり、どのような経緯で記事が書かれたのかが明確になっている。子どもたちの活字離れが騒がれている昨今、新聞がどのように作られ、どのような意図があるのかを子どもたちに考えさせることが必要である。そこで、1面を取り上げ、興味のあるニュースを1つ上げさせる。そのニュースになぜ興味を持ったのか、他の新聞社ではどのように書かれているのかを調べ、特に見出しの役割について考えていく。読者が興味を惹かれる見出しとはどのようなものか、自分だったらどのような見出しにするかを考えさせることで、メディア・リテラシーが育まれると考えた。

授業の内容と身に付くと期待される能力の考察

①新聞の1面を見て、どの部分に注目するかを考える。
→普段児童があまり触れることがないと考えられる新聞を扱い、読者がどの部分に注目して新聞を読むのかを考える。また、なぜその部分に注目するのかを考え、製作者の意図を読み取る力を身に付ける。
②各新聞社の同じ記事の見出しの違いを調べ、どのような特徴があるのか考える。
→各新聞社がどのような意図を持って見出しを付けているのかを考え、違いを調べる。自分だったらどの新聞社の記事を読みたいかを考え、なぜその新聞社を選んだのかを明確にすることで、新聞社の伝えたいことを読み取ることができる。
③自分だったらどのような見出しをつけるか考える。
→実際に製作者になったつもりで見出しを付け、記事のどの部分を見て見出しを付けたのかを明確にする。実際に作ってみることで、製作者の意図を知り、新聞に興味を持つことができるようになると考えられる。
④出来上がった作品を全体で共有し、振り返る。
→出来上がった作品を全体で共有することで、自分の意見を発信することができる。また、他の児童の意見を聞き、一つの記事でも様々な見出しが付けられることに気付く。最後に学習を振り返ることで、慎重に情報を読み取り、向き合う力が育つ。

5. おわりに

イギリスやカナダの教室で実際に行われた授業は、メディア・リテラシーを子どもたちに育ませることをねらいとしていた。しかし、日本の学校教育では、メディア・リテラシーを子どもたちに育ませることをねらいとした授業がほとんど行われていない。この状況から思い付いたことが、実際の授業を想定した学習指導案作りであった。どのような授業をしたら、子どもたちにメディア・リテラシーを育ませることができるのかということを考えてみたが、漠然としたイメージしか湧かず、必ずしもメディア・リテラシーを子どもたちに育ませることができると断言できる指導案ではないと私は考えている。今後は、メディア・リテラシーを子どもたちに育ませることができる授業を追い求め、研究を続けていくつもりである。

参考文献

【1】菅谷明子,メディア・リテラシー ―世界の現場から―,岩波新書,2000
【2】オンタリオ州教育省編,FCT（市民のテレビの会）訳,メディア・リテラシー ―マスメディアを読み解く―, p8-11, 1992